
情動表情を伴わずに情動語を発したダウン症候群幼児
～個性の強い発達の姿～

石川 丹

I. はじめに

精神遅滞、自閉症などの子どもは、今の世の中に人一倍の生きにくさを持つため障害児と言われる。

健常児と言われる子は、それなりにスムーズに、つまり平凡な生活をしていると言うとすると、障害児と言われる子はつまずきながら非凡な生活をしている、換言すると、個性の強い生活をしている、という言い方も可能となる。

障害児と言われる子の発達は得手不得手が極端であるとも言える。本稿では情動に関する発達の良い意味でのアンバランスを示した障害児を報告する。

II. 2歳5ヵ月齢ダウン症候群女児のエピソード

母親が恐ろしげな声をあげながら怪獣の人形を児の眼前にかざして見せると、怪獣を見た児は恐怖表情を示さずに「こわーい」と言った。

2歳5ヵ月でまだ二語文を発せず言語発達に遅れを認めている本児が、情動表情なしに情動語を発したこのエピソードは発達的には大きな意味があるので、以下に考察する。

母親が演出した恐怖状況に接した児が、恐そうな表情をしながら「こわーい」と情動語を発したのであれば、ことさら検討する必要はない。

III. 情動の神経学と発達心理学

1) 人間の情動とその表現¹⁾

幸、悲、怒、嫌、恐、驚の六つが人間の基本情動である。

人間を含む系統発性的に上位の動物は大脳辺縁系の扁桃体が興奮することによって情動を生じる。扁桃体の興奮が扁桃体のすぐ前方にある系統発性的に下位の間脳の視床下部に伝わると、自律神経を介してその情動にふさわしい表情が表現される。

動物的レベルでの情動表現は扁桃体→視床下部→自律神経の経路を取り、前頭葉を介さない。しかし、系統発生の頂点に立つヒトの場合は情動表出の前には記憶に基づく情動の価値判断が介在し、情動の意味づけが成されてから情動が表出される。

人間の場合、価値判断は前頭葉神経細胞の活動によって形成されるので、興奮は扁桃体

→海馬→前頭葉→視床下部→自律神経へと伝播することになる。

動物とは違って前頭葉が必ず介在する。怒っていいぞ、とか、怒っちゃまずい、とかの判断が前頭葉で行われてから情動が表現される。キレ易いかどうかはこの価値判断に関わっている。見て見ぬ振り、とぼけも前頭葉の介在による。

2) 情動の言語的ラベリング、能記・所記²⁾

扁桃体で生じた情動を左半球前頭葉側面下部の言語運動中枢（ブローカ領域）が言語化する。それぞれの情動に見合った情動語で情動をラベルすることを情動の言語的ラベリングと言う。

ソシュールは言語の本質を能記・所記で説明した。能記とは記号表現を言い、言葉や文字である。所記とは言葉や文字が持っている意味内容を言う。

だから「こわーい」という発声表現が能記、「こわーい」という情動語に込められた恐怖情動が所記である。

「こわーい」という発声音に恐怖情動が一对一でマッチングさせていることを、他者が理解すれば言葉が成立したことになる。つまり、分かり合い（コミュニケーション）の成立である。

泣きながら「悲しい」と言えば、その人が悲しんでいるのが分かる。泣きながら「うれしい」と言えば、うれし泣きだと分かる。

黙って泣いて居たら、どういう情動の表現として泣いているのか分からないことがあるが、この場面を非言語的コミュニケーションという視点から考えると、その泣きを見ている人が、泣きに至った文脈を検討することによって意味が分かることがあるはずである。

3) 生後の中枢神経の成熟

出生後の脳の成熟、すなわち神経回路の形成はヘッケルが言った「個体発生は系統発生を繰り返す」に準じ、延髄→橋→中脳→間脳（視床下部）→終脳の順に進む。

大脳辺縁系のうちの帯状回は1歳ごろには成熟する。終脳の成熟は4～6歳で大人の約80%完成する。

4) 生後2～3カ月の赤ちゃんも「私は私」を持っている

Murray³⁾は別室に居る赤ちゃんと母親がテレビ中継を介してやり取り出来るような装置を作って母子相互交渉の観察研究した。

対象の赤ちゃんを1～6カ月齢として母親にあやしてもらったところ、初めのうちの生中継の時はどの月齢の赤ちゃんも母親のあやしに乗って機嫌良く反応していたが、赤ちゃんが見ている母親画像をビデオ画像（赤ちゃんをあやしている母親のビデオテープ）に切り替えてしまったところ、2カ月齢以降の赤ちゃんはやがてあやしに乗らなくなってそっぽを向いてしまった、という。

これは2カ月齢の赤ちゃんは既に「私は私」を持っていること、つまり表象していることを示唆している。

著者は、母親が帰宅するまで父や祖父母のなだめに乗らず3時間泣き続け、帰宅した母親が抱いたところ立ちどころに泣き止んだ3カ月齢児を目撃したことがある。このエピソード

ソードも3ヵ月齢の赤ちゃんが既に明確な意志、自我、表象を持っていることを示唆している。

5) 6～8ヵ月児がくすぐられた時の情動起源

中野⁴⁾は乳児がくすぐられた時に笑うのはくすぐったいからというよりも、親の大きな動作、くすぐる振り、声の調子の変化に対して生じていることを明かにした。このことは赤ちゃんが「きゃっきゃきゃっきゃ」と笑う情動は感覚的レベルで生じるのではなく、その時の文脈や状況の認知に基づく表象の結果として生じることを示唆している。

つまり、扁桃体の興奮を動物的レベルで視床下部に伝えているのではなく、前頭葉を介したヒト的レベルの認知活動の結果としての情動表現をしていることを示唆している。

6) 乳児の表情知覚

発達心理学の知見によると4ヵ月齢児は幸福顔を良く注視し、7ヵ月齢児は恐れ顔を良く注視する。10ヵ月齢になると顔の肯定表情と否定表情の区別が可能になる。

7) 情動語の理解

乳児は表情によって相手の情動を判断するが、2～3歳を過ぎて情動語の理解が可能になると、情動表情より情動語を優先利用し判断している⁵⁾。

2歳児は情動表情の言語的命名(ラベリング)、つまり情動語を理解している。他者の情動表情弁別に当たっては映像的視覚的判断よりも言語的聴覚的判断を使った場合の方が理解が良い、つまり情動表情理解より情動語理解の方を優先させて使っている⁶⁾。

8) 情動語発語は何歳?

発達に心配のない子は2歳前には「こわーい」を言う。

9) 情動の演技は何歳から可能?

役者はその場で情動体験をしていなくても、記憶を基に心的情動を表現することが可能であるが、子どもは何歳ごろからそうした演技が可能になるのであろうか。

子どもが母親になったつもりで母親の様に振る舞う成り切り遊びは、発達に心配のない子であれば3歳前後にはできるようになる。3歳頃は母親に成り切ってしまうが、4歳近くなると演技していることを自覚出来るようになる。つまり、他人の立場でものを考えることができるようになり、これを他者視点ないし役割取得の獲得と言う¹⁾。

IV. 考察

母親が演出した恐怖を見た児が、それに応じて怖そうな表情をしながら「こわーい」と言ったなら、通常の発達の道筋に則った発達だから議論の必要はない。

発達の遅れているダウン症候群の2歳5ヵ月児が、恐怖表情を伴わずに恐怖を表わす言葉を発したこと、つまり、情動表出と情動語を分離させることが出来たこと、の発達の意味が議論の焦点となる。

1) 演出された恐怖を知覚していなかった?

扁桃体が興奮しなかったのであれば当然恐怖情動は生じなかったことになるが、本児は

日頃から怖がるべき場面で怖がる表情をしているので、この解釈は考えられない。

2) 能記としての「こわーい」の使い方をまだマスターしていなかった？

以前から「怖い」は適切に言えているので、これも考えられない。

3) 母親の働き掛けに乗らなかった？

母親はこの子をうまく乗せることができなかった、つまり本児の共感を引き出すことができなかったと考えることは可能である。こう考えることが出来るからこそ、恐怖情動を感じずに情動をラベルすることはできていたこと、つまり情動と情動語の分離ができていたという解釈が可能になる。

4) 演技した？

恐怖は感じ、前頭葉は恐怖表象を言語運動中枢に伝えて言語化した。同時に視床下部へは興奮を伝えなかったために恐怖情動表情が形成されなかったとすると、つまり脳内活動を分離できていたとすると「顔で笑って心で泣いて」という演技が出来ていたということになる。

意図的演技は一種の自己制御で通常は3歳過ぎに可能になる。2歳半ごろになるとアンパンマンなどキャラクターに成る、いわゆる成り切り遊びをするようになる。3歳近くなると身近な人間である母親などに成るようになり、ある時は自分、ある時は母親、というように現実と虚構を行ったり来たりしながら、自らを外側から、つまり客観的に見る練習をするような形になり、4歳前後には自己を対象化して演技をすることが可能になる。

成り切り遊びがまだ出来ていない本児が演技したとは考えにくい。

5) 情動表情理解より情動語理解を優先させていた！

こわーいという情動と「こわーい」という情動語を分割できていたということは、情動を表情を介して理解する段階から、表情なしに情動語だけで理解できる段階に発達していたことを示唆している。

こうした発達段階は発達に心配のない子では2歳過ぎなので、本児はこの点の発達に遅れはないと言えることになる。全体的に発達の遅れが見られる本児の中では、この点の発達はうまく行っていると言える。本児の発達のアンバランスのうちの凸の部分、つまり進んでいる部分である。

V. 要約

2歳5ヵ月齢のダウン症候群女児は情動表情をしないで情動語を発した。

言語発達の遅れを呈している本児にあって、情動語の使い方は歴年齢相当の発達をしていること、を示唆するエピソードであったことを論述した。

引用文献

- 1) 伊藤正男、他：岩波講座認知科学6、情動。岩波書店、1994。
- 2) 石川 丹：発達障害幼児療育学序論I。そだちと援助1、9-21、2002。
- 3) Murray L：Emotional regulation of interactions between two-month-olds and

their

mothers: Social Perception in Infancy. Ed. by Field FH, Norwood, NJ, 1985.

4) 中野 茂 : 親と乳児との「じゃれあいゲーム」と情動の共感---くすぐられたとき乳 児が笑うのはくすぐったいからか、楽しいからか---. 第40回日本教育心理学会、1998.

5) MacDonald PM et. al. : Schematic drawings of facial expressions for emotion recognition

and interpretation by pre-school-aged children. 122, 373-88, 1996.

6) 桜庭京子、他 : 2~4歳児における情動語の理解力と表情認知能力の発達の比較. 発達心理学研究、12、36-45、2001.